



クリちゃんの動物園散歩（一）

根本進

私が「クリちゃん」を朝日新聞の夕刊に画きはじめたのは昭和二十六年でした。

当時の私はその四コマの漫画を一日に一枚画くだけ——と言えば、ずいぶんの大きな生活のようで、実はとても苦しい毎日でした。連載に字を使わない漫画（パントマイム、またはサイレント漫画とも言います）を画くなんて、とんでもない事をはじめてしまったと後悔したこともあります。

出来なくて、行きづまると仕事忘れにデパートを歩いたり、野球、映画などをみたり、日中から酒を飲んでみたり……いろいろな気分転換を試みました。動物園の散歩もその一つで、これはかなりの効果がありました。

疲れた頭を休めるには、サル山の前に行って十五分も見てみると、行きづまった考えや、嫌な気分はケロッと忘れます。

よく見ていると、どんな動物でも面白いもので、象が藁を食べる時は、あんな大きな図体でも、しぐさのキメは意外に細かいのに驚きます。たとえば上野のインディアは一束の藁を鼻で持ち上げると、まず前肢の足首にぶつけて塵を払い、穂先の方をちょっと口にくわえて、鼻先で茎の部分を丁寧にしごいて揃えます。改めて鼻で藁束の中ごろを持ちなおしてから、茎の美味しい所だけを一口にくわえて、あとはバリッと噛み切って捨てます。それからゆっくりと口中の藁をモリ、モリと味わう様にすりつぶして食べます。

同じ事をするにも一緒にいるジャンボと、メナムは少しずつ違って、つまり十頭十色の個性差があるのは興味深いことです。そんな光景にみとれていると、私の頭の中が不思議にさっぱりしてきます。

私だけでなく、他のお客を見ても相手が動物ゆえに、



S
U
S

すぐ心がなごむ例は沢山見ました。「ほらほら、孔雀くわんせうさんが大きな羽をひろげてるでしょ……」なんていうと、それまで大声で泣いていた子も泣き止んでしまう様に。

スイスのチューリヒの動物園でした。寒い曇り目で、お客はまばら。四人の親子が私の前後に離ればなれに歩いていました。この一家は、ここへ来る電車の中で、兄弟喧嘩がはじまり、それをきびしく叱ったり、かばったりするうちに夫婦の間ももめてきて、お互いに冷たい顔付きになっていました。

ところが動物園の中ごろでヒグマの赤ん坊が三匹で母親のオッバイの取りっこをしていました。ヒグマの乳房は胸に二つ、腹に二つあって、それぞれが乳房にかぶりついてチューチュー音をたてて吸うのですが、出が悪くなると、急いで他の乳房にとりつきます。三匹が母親の体で右胸から左の腹へ、かと思うと右腹から左胸へ、大あわてに相手かまわず乗り越えて先を争う様は、全く可愛らしくて、滑稽です。そこだけに大勢のお客が溜って笑声が止みません。そして気がつくと、さっきの一家はその後は手をつなぎ合って歩いていました。

南米はチリの首都サンチャゴの動物園では、愉快的な経

驗があります。丘を登って行くと動物園の入口でした。

初符を買う時に「案内図は？……」と英語できいてみると、切符売りのおばさんの答えはスペイン語で、私にはわかりません。あきらめて歩き出すと、「ちょっと待って」と合図して大急ぎで部屋を出て行きました。向うの木蔭の長椅子で、十二、三歳の少年が本を読んでいます。おばさんは大声で何度も呼び、「英語で案内して上げなさい」と言っている様子です。しまいに本をもぎとり、手をひいて来ました。「イヤだよ、僕だってそんなの……」と言わんばかりの少年のふくれっ面をみて、こっちも嫌になりました。私は独りで気がねなしに見物したかったです。プリプリとイヤイヤの二人は仕方なしに黙って歩きました。

遠くを眺めると、ここもスイスに似てアンデスの山々が屏風の様です。見晴しのよい所に、チリーの狐、ハナグマ、アルパカ、それからいくつか南米の小動物の展示が続き、その先にウーリーモンキーがいました。南米産のサルたちは尾を上手に使って、まるで手が一本多いみたいに便利そうです。

ところが、その中の一匹が木から落ちたのにはびっく

り！思わず大笑いです。こんな光景を見るのは少年もはじめてらしくアハハハと腹をかかえて笑っています。それがきっかけで二人は仲よくなりました。それから彼の熱心な案内がはじまりました。

ちよっとした説明でも、その動物の習性をよく知っている様子でした。アフリカ水牛と言えは暴れん坊の印象ですが、柵を越えてその檻に入って行って、大きな背中に跳び乗ったのには驚きました。少年の名はホルヘ君といい、前園長のこともでした。だから幼年時代からここは自分の家の庭なのです。

嬉しかったのは、南米の小鳥の美しい羽毛を沢山スーベニアに呉れたことですが、その集め方が変わっていました。どこからか長い木の枝を見つけてきて、その先につばをつけ、ケージの網目の間からそーっと突っ込みます。地面に落ちている羽毛が、その枝先にくっつくことまたそーっと取り出します。ホルヘ君は一枚一枚時間をかけてとるのをちっとも面倒がらず、落付いて、やっています。実はこれは小鳥を驚かささない心くばりだったのです。大人にはとても思いつかぬステキな思いつきだと感心しました。

(漫画家)